

## ヒトの本性と自然災害

## ～「ノアの方舟」あるいは「ソドムの町」～

シンキング・バーズ  
歴史科学研究班

## 過去文献が語る 自然災害時の対処法

**東** 日本大震災以降、毎年のように日本列島を襲う巨大な自然災害に、ボクたちは、地球環境の変化を感じながら日常生活を営んでいます。2019年（令和元年）も、台風15号や台風19号による風雨災害に見舞われた年になり、新たな「被災地」が生まれました。

いつ、どこで、ボクたち自身が「被災者」になるかもしれない日常の中で、ボクたち歴史科学研究班としては、過去の文献から警鐘を鳴らすしかありません。

### ●「ノアの方舟」と避難

**自** 然災害に関する過去の文献の中で、最も良く知られ、かつ説得力のある教訓を提示しているのは、やはり『旧約聖書』です。豪雨災害に関する「ノアの方舟」の記述と、地殻災害に関する「ソドムの町」の記述は、ヒトの生理的な本能を戒める記述という側面があります。神の「善」に対するヒトの「悪」という聖書固有の性悪説が根底にあるとはいえ、時には真摯に、そのことばに目を向ける価値はあると思います。

「ノアの方舟」の記述は、多くの方がご承知のように、大洪水に関するものです。その概略を書いておきます。

地上に満ちたヒトの悪業の数々を悲しんだ神は、その生き物たちを滅ぼすことを決意し、天から大雨を降らせて大洪水を起こ

すことにします。その大洪水に先立ち、神はノアとその家族を、正しく生きた者として救うと告げ、大きな方舟を作るよう命じます。そして、家族と選ばれた動物たちが方舟に入り、災厄から逃れよ、と言います。

ノアたちは、神のお告げに従って方舟を作り、中に入ります。すると神は、雨を降らせ始め、40日間続いた大雨によって、地上は大洪水に見舞われます。ヒトや肉を食む生き物たちは、死に絶えてしまうのです。

方舟で40日間を過ごしたノアたち家族と動物たちは、47日目に地上の水が引いていることを知り、54日目に方舟を出て、地上に戻ります。神は、そのノアたちを祝福し、その家族が増えることを願い、地上の食べ物や海の幸などを与えるのです。

この逸話でのキーポイントは、やはり方舟への「避難」です。大雨に際して、避難しなかった人々は命を落とし、避難したノアたち家族だけが救われたのですから、「避難」の重要性は、数千年前の人類が、すでに認識していたことなのです。

にもかかわらず、数千年後のボクたちは、口を酸っぱくして「避難」を呼び掛けています。人類の本性には進歩がないという意味で、重要な逸話とボクたちは考えます。



## ●「ソドムの滅亡」と脱出

# 地

穀災害に関する『旧約聖書』の記述は、『創世記』のソドムや『出エジプト記』の地割れなどに見られます。ソドムに関する記述は、火山災害に関するものです。その概略は、以下のようなものです。

ソドムは、神が禁じる同性愛（ホモ・セクシュアル）がはびこる町でした。それを憂いた神は、ソドムの住民を悪人とし、町を滅ぼすことを考えます。

エジプトから移り住んでソドムの住人になったロトは、神の使いであるアブラハム一行を町に招き入れます。町の住人たちが、ロトの家を取り囲んで一行の引渡しを迫る中、アブラハムは、神がソドムを滅ぼそうとしているとロトに告げます。それを聞いたロトは、町の人々に伝えますが、誰も相手にはしません。

神の使いの天使たちは、ロトとその妻子に、早急に町から逃げ出すよう急き立てます。「命がけで逃れよ、後を見てはいけない」。ロトたちは、早朝に町を離れ、近隣の小さな町に急いで向かいます。

やがて神が天から降らせた硫黄と火は、窪地にあるソドムの町を覆い、あらゆる生き物の命を奪って行きます。ロトの妻は、その脱出の途中で後ろを振り向いたため、塩の柱になってしまいました。

ロトとその娘たちは、神の示唆によって命を救われるのですが、やがて父子相姦で子供をもうけ、子孫を作ります。

今でこそ社会的に認知されつつある同性愛、あるいは、今でもタブーとされる近親相姦の文脈で語られる火山災害のこの一節は、「命がけで逃れよ、後を見てはいけない」が、救命措置のすべてです。豪火は、地震災害でも起こり得る現象ですが、そこから

の脱出は、現実問題として、ほとんど困難です。「まさか！」となる前、豪火が迫る前に、ひたすら逃げるしかないのです。

ここにも、数千年前の記述が残した現代性があると言えます。

## ●不謹慎な本性とどう戦うか

# ヒ

トの生理的本性は、時として残酷な心理を生むことがあります。けして許されない心情を抱いてしまうのは、災害時と同じです。

横浜で関東大震災に遭遇した作家の谷崎潤一郎は、火災に巻き込まれた街の様子を眺めながら、子供のようにはしゃぎ、「もっと燃えろ」と心の中で叫んでいたと言います。後の回想でのその記述は、不覚にもヒトの本性を露わにってしまった記述なのかもしれません。

ヒトは往々にして、自然災害などの不幸な出来事に対して、「ザマァ・・・」のような不謹慎な心情を抱くことがあります。それは、けして公にされるべき心情ではありませんが、ヒトの本性の一部として、在るものと捉える必要はあります。倫理上で許されないとはいえ、現実には在るのです。

メディアが発達した現在、ボクたちは、毎年のように自然災害の現場を撮影した映像に接します。スクープとして撮影された一般住民のスマホ映像が公開されることも多く、強風で屋根が吹き飛ばされたり、トラックが横転したり、滝のように道路を流れ下る濁流の映像などを目にします。その映像を目にした時の心情は、もちろん個人差があります。一般的には「怖い」「すごい」などだと思われそうですが、中には「おもしろエ」などという印象もあり得ます。

不謹慎とどう戦うかは、ヒトの本性との戦いになると覚悟する必要があります。

(2019年12月4日)

**シンキング・バース新書**

ボクとワタシの日本語診断  
ヒトの本性と自然災害

2019年12月4日（初版）発行

著者：シンキング・バース  
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。